

# 『正法眼蔵』の言語表現に関する一考察

―構文の複文化による表現の特徴について―

藤川直子

## はじめに

道元禪師（一一〇〇～一一五三）が、仮字『正法眼蔵』（以後、特別な注釈がない場合は『正法眼蔵』とのみ記す）をなぜ著したのか、そして、言語で表現することの難しい「正伝の仏法」を、如何にして理解させようと心を砕いたのか、その方法論に関して複文表現の構文構造を解析することにより明らかにする。道元禪師は『正法眼蔵』において、複文による複雑な言語表現を多用することで「正伝の仏法」を論述しようとしている。その目的と意図を考察する。なお、『正法眼蔵』の分析は、『道元禪師全集』上巻（大久保道舟編、筑摩書房、一九六九年）を用い、読み方および頁数は、新刊の『本山版訂補正法眼蔵』（河村孝道・角田泰隆編、大法輪閣、二〇一九年）を参考とした。句読点については、後者を参考にして筆者が付した。

## 一 『正法眼蔵』について

周知の通り、『正法眼蔵』には、和文で書かれた仮字『正法眼蔵』と漢文で書かれた真字『正法眼蔵』（三〇〇則）が存在する。道元禪師の著作量は膨大であるが、その中で、和文で書かれたものは、和歌以外では、仮字『正法眼蔵』と「永平寺示庫院文」・「観音導利興聖護国寺重雲堂式」など限られたものである。これは、当時の知識人達が、漢文で記載することを常套としていたことから、当然なこととも考えられるが、敢えて本作を和文（仮字）で記述した意図は明確には示されていない。

## 二 先行研究

『正法眼蔵』は読むこと、理解することが極めて難しいとされ、これまでも多くの研究者がその原因について論究し、

主として、漢文に対する親和性の低さと禪籍特有の語彙の解釈等による影響が大きいとしている。加えて、道元禪師の和文の構文の複雑さ、複文の多用にも起因するのではないかと筆者は考える。例えば、榊林皓堂氏は、「『正法眼蔵』は教義・思想が深いばかりでなく、語法に特異性がありすぎる。難解の一つの理由がそこにあると思われる」（『道元禪の本流』、大法輪閣、一九八二年、二一八頁）と記載している。以下、これまでの研究者によって述べられている諸論説について例示してみたい。

(一) 榊林皓堂氏 — 一般的解釈・従来の漢籍解釈との相違  
前段、『道元禪の本流』第七章『正法眼蔵』における語法で、文法上の問題として取り上げるのではなく、「どこまでも宗義上の問題として検討しようとするもの」（同、二一八頁）との断りを記した上で、具体例を挙げて論じている。例えば、『現成公案』の巻での言句「自己をはこびて方法を修証するを迷とす、万法すすみて自己を修証するはさとりなり」を取り上げ、経蒙の『正法眼蔵抄』の主旨を「存在するものはずべて真理の顕現」であると捉えることによって、「我々は我々として絶対的な存在、万法は万法として絶対的な存在」であるから「天地宇宙を『迷いの世界』（全迷）と言っても『悟りの世界』（全悟）と言っても同じことになる」（同、二二二頁）

としている。また、「諸悪莫作」の巻では、従来「諸の悪はなすことなかれ」と読まれることの多かった四句偈を、「諸悪つくること莫かれ」と読むことは、いわば「正伝の立場から解説する」（『道元禪の研究』、禅学研究会、一九七四年、三〇一頁）ことになると考え、「文意は文章の約束、文字の通念とはおよそ隔絶したものと成る」と述べ、文意の解釈が従来の一般的な解釈と乖離していることを挙げている。

(二) 寺田透氏 — 言葉遣いの特異性を指摘

『寺田透・評論』道元論集—思惟と言語（思潮社、一九八一年）の中で、「道元の文章は日本文としては破格であって、幾多の場合不当でさえあるということをし、いわば「承当」乃至「保任」することが、かえってその精神と思惟を高めるゆえんだということをし、念頭におこう」（一六頁）と述べ、さらに「漢語の用い方の異風なること」（同、一七頁）を挙げ、また、道元禪師が、「語を普通の用例や自分自身の他の場合の用例とちがう意味に使用することが多かったことの例示で、中には、あるときは通常の用法に従いながら、別の場合には自己流の用法に従うやり方の例も含まれ」（同、二九頁）という記述から、道元禪師の言葉遣いの特異性を語彙の使用方法・解釈の異質性として指摘している。

(三) 角田泰隆氏 — 異なる「一」と「他」を同一とみる解釈  
『道元禪師の思想的研究』第八章 言語表現 (春秋社、二〇一五年) の中で、先ず、禪を特徴付ける言葉として、「不立文字、教外別伝」と「直指人心、見性成佛」を挙げ、禪は「学問研究を中心とする仏教に対する批判」(四九四頁) から、「釈尊の仏法は文字(経論)の上にあるのではなく」、「自分の言葉で自内証を語り」、「人間の本性を見究め、自己を明らかにする」(同頁) ことを本来の目的としたとする。そして禪の流れをくむ、道元禪師も「自らの行いによって示し、自らの言葉によって語る」(同、四九五頁) ことを選び、「正伝の仏法を言葉に記して残す道を選んだ」(同、四九六頁) としている。

さらに、道元禪師が言葉によって表現する場合、「絶対同一」という解釈を用いることによって、彼の特異な言語表現を解析する。道元禪師は、一般的・常識的に異なると考えられる複数のことを「複数の異なった言葉が、前提として二元論的・相対的観念をもつ同一ではなく、一元論的・絶対的観念をもつ同一である」(同、五〇四頁) のだとして、「異なる事物・事象として表現されたものが、実際には、全き同一『絶対同一』である」と述べている。その例として、「摩訶般若波羅蜜」の巻での「色」と「空」(同、一〇頁) や、「三界唯心」の巻での「三界」と「心」(同、五一三頁)、等々を挙げる。これ

らによって、各事物・各事象が存在として・現象として同一であることを示しているとする。

#### (四) 田島毓堂氏 — 国語学的アプローチによる『正法眼蔵』の研究

『正法眼蔵』の写本の一つである「乾坤院本」に基づき、著書『正法眼蔵の国語学的研究』(笠間書院、一九七七年) を著わし、この中で「表記法」、「音韻」、「語法」、「文論」、「漢語」といった章題のもと、国語学的・文法的分析により、『正法眼蔵』を詳細に分析している。「語法」の研究(品詞毎の分析)が主軸を成しているが、「文論」における活用語連体形による中止的用法の解釈—連体形の形で、一旦文を中止して後文に掛かってゆくもので、一般の連体的用法と混ざるものがないようにするべき(一三〇—一頁要約)—などの見解は、道元禪師の表現の特異性の指摘であり、他の表現方法も含めて検討すべき主張だと考へる。

これらの見解のように、『正法眼蔵』を理解することの困難さは、漢籍および言句の特異な使用法と道元禪師独自の解釈によるところが大きいと思われるが、鏡島寛之氏は、「道元禪師の言語観と眼蔵の表現」(角田泰隆編集、『道元思想大系』第十三巻、同朋舎、一九九五年)の中で、「国語国文と

しての眼蔵の文章の表現が、眼蔵の思想内容と相離れ得ない必然性をもっていることを予想できる。眼蔵の表現の特異性、その文章のありかたは、結局、眼蔵の思想内容の特異性の即応反射にほかならない」（二二三頁）と述べている。

これら従来の解釈から考えられることは、『正法眼蔵』における表現に関して、思想的には、これまでの表現と一線を描いていること、漢語の使用・解釈に特殊性が見られること、言語を二元的な対象物として捉えないこと等々を挙げる事が可能だと考える。翻って国語学的には、文章の途中で「pause」ともいふべき不完全さを残して後文に繋げるという表現がしばしば散見され、これにより断定的表現を避けているという推測が可能となるのではないだろうか。

以上の先行研究の見解を踏まえ、次の章では、文末表現を中心として、文法的側面も勘案した検証を試みることにする。『正法眼蔵』の難解さは文章の複雑さ、構文の組み立ての重層的構造にも一因があると考えられるからである。

### 三 『正法眼蔵』に於ける構文考察

#### (一) 文法的な文体の分類

文の種類は、一般的には、単文と複文に分けられる。構文を文法的に見てみると、単文とは、「一つの節で出来ている文。一つの述語と通常それに従属していくいくつかの成分とから

成り立っている。意味的には、単一の叙述内容つまり単一の事態を表している」（『日本語文法事典』、日本語文法学会、大修館書店、二〇一四年、九九頁）とされ、基本的には、主語と述語が一つずつから成り立つ文のことである。それに対して、複文は、「単一でも生起しうる述語が二つ以上存在する構造をいうもの。二つ以上の述語をもち、単一の発話行為をなす言語単位」（同、五四〇頁）と定義されている。要は、

単文 — 一文節で構成されている文。一つの述語を持つ。

複文 — 複数の節から構成されている文。二つ以上の述語を持つ文

となる。この複文の主語・述語が対等に並んでいる場合、「重文」とよばれることもあり、さらに、これら構造的な分類とは異なり、「発話・伝達的な機能からの分類」として、「平叙文、疑問文、命令文、勧誘文・意志の文、肯定文・否定文、感嘆文」（同、五六四頁）、および、「反語文」（同、五一一頁）等の内容的な分類もあるとする。

具体的に例示すると、単文は、「aはbである」、「aがbをする」という文章であり、複文は、「aはbであり、cはdである」、あるいは、「aがbをしてcはdをする」、「aはbでありcである」、という構文で代表される。英語でいうところの関係詞による構文（主節と従属節からなる複文を狭い意味での複文と称する）、例えば、「aがbする時にcであ

る」というような文章は、『正法眼蔵』の中でも散見され、特に、条件節の文章はかなりの数の記載がある。今回は、本文に対する位置づけとの観点から、重文と狭い意味での複文を合わせて一つのグループと見做して「複文」とし、さらに、これら構文文法的な分類に、内容を勘案して再分類し、『正法眼蔵』の複文の構文を次のようにグループ化することを試みた。

## (二) 複文の内容による分類

いわゆる、「文法」に基づいた場合、『正法眼蔵』の文章は、複文で表現されていることが多いといえる。このため、これらを前述の内容的分類を採り入れて、細分化を試みると、結果的に左記の七つの分類が可能になると考える。

### 複文の細分類

- A 平叙文 ↓ 肯定的複文（推量を含む）
  - B 否定文 ↓ 否定的複文
  - C 疑問文 ↓ 疑問的・反語的複文
  - D 命令文 ↓ 命令的・禁止的複文
  - E 展開文 ↓ 展開的複文
  - F 言い換え ↓ 言い換えによる複文
  - X 勧誘文・意志の文・感嘆文 ↓ 該当なし
- これら、A～Fまでの複文の分類を『正法眼蔵』から、以

『正法眼蔵』の言語表現に関する一考察（藤川）

下に具体的に例示する。

### A. 肯定的複文

- ① 佛道もとより豊儉より跳出せるゆゑに、生滅あり、迷悟あり、生佛あり。（『現成公案』、二頁）
- ② 諸悪は、此界の悪と佗界の悪と同・不同あり、先時と後時と同・不同あり、天上の悪と人間の悪と同・不同なり。（『諸悪莫作』、四二三頁）
- ③ 志求阿耨多羅三藐三菩提は、弄眼睛なり、壁面打坐なり、面壁開眼なり。（『阿羅漢』、四九四頁）
- ④ 心これ皮肉骨髓なり、心これ拈華破顔なり。（『三界唯心』、五五一頁）
- ⑤ 結跏趺坐は、直身なり、直心なり、直身心なり、直佛祖なり、直修證なり。（『三昧王三昧』、八三〇頁）
- ⑥ いはゆる生を爲説するに、すなはち佛語をうくるあり、生・老を爲説するに、佛語をうくるあり、生・老・病・死を爲説するに、佛語をうくるあり。（『四馬』、一〇六三頁）

### B. 否定的複文

- ① 山河大地等、これ有無にあらざれば、大小にあらざり、得不得にあらざり、識不識にあらざり、通不通にあらざり、

悟不悟に變ぜず。（『身心学道』、四八頁）

②しかあればすなはち、兀兀地は佛量にあらざ、法量にあらざ、悟量にあらざ、會量にあらざるなり。（『坐禪箴』、一四六頁）

③水は強弱にあらざ、濕乾にあらざ、動靜にあらざ、冷暖にあらざ、有無にあらざ、迷悟にあらざるなり。（『山水経』、三九九頁）

④諸佛ならびに國土は、兩頭にあらざ、有情にあらざ無情にあらざ、迷・悟にあらざ、善・惡・無記等にあらざ、淨にあらざ穢にあらざ、成にあらざ住にあらざ壞にあらざ空にあらざ、常にあらざ無常にあらざ、有にあらざ無にあらざ、自にあらざ他にあらざ。（『十方』、七三二～七三三頁）

⑤思量分別のおよぶところにあらず、不思議分別のおよぶところにあらず、思量・不思議の不及のみにあらざ。（『安居』、八七三頁）

### C. 疑問的・反語的複文

①（恣魔なるがゆゑに、一心の所見これ一齊なるなり。これらすでに心なり。）<sup>③</sup>内なりとやせん、外なりとやせん、來なりとやせん、去なりとやせん。（『身心学道』、四八頁）

②大悟底人却迷の時節は、大悟を拈來して迷を造作するか、佗那裏より迷を拈來して、大悟を蓋覆して却迷するか。（『大悟』、一一八頁）

③手眼世界なるべきか、人手眼のあるか、ひとり手眼のみ飛霹靂するか、頭正尾正なる手眼の一條・兩條なるか。（『観音』、一二六五頁）

④明鏡に古の道理ありやなしや、古鏡に明の道理ありやなしや。（『古鏡』、二八〇頁）

⑤ちなみに、僧過遮邊去せる、香嚴の索底なりや、香嚴の奉底なりや、香嚴の本期なりや。（『王索仙陀婆』、九一一頁）

⑥（なむちがいふ涅槃は、いづれの涅槃なりとかせむ。）聲聞の涅槃なりとやせむ、支佛の涅槃なりとやせむ、諸佛の涅槃なりとやせむ。（永光寺十二卷本「三時業」、一〇五六頁）

### D. 命令的・禁止的複文（すべし、なかれ、など）

①崩壞の形段は、この盡十方界に參學すべし、自己に學することなかれ。（『古仏心』、一一三頁）

②作佛を圖することなかれ、坐臥を脱落すべし。（『坐禪儀』、一四二頁）

③目をかろくすることなかれ、目をおもくすることな

れ、耳をおもくすることなかれ、耳をかるくすることなかれ、耳目をして聰明ならしむべし。〔坐禪箴〕、一四八頁)

④塚間の一堆の塵土、あながちにをしむことなかれ、あながちにかへりみることなかれ。〔行持・上〕、一九六頁)

⑤しかあればすなはち、ほとけを供養したてまつらんとするに、その身まづし、といふことなかれ、そのいへまづし、といふことなかれ。〔供養諸仏〕、九九八頁)

#### E. 展開的複文(述語の機能・内容が異なる文)

①しかあるを、佛性は動・不動によりて在・不在し、識・不識によりて神・不神なり、知・不知に性・不性なるべき、と邪執せるは外道なり。〔仏性〕、四五頁)

②経歴といふは、風雨の東西するがごとく學しきたるべからず、盡界は不動轉なるにあらず、不進退なるにあらず、経歴なり。〔有時〕、二九六～二九七頁)

③いかならんか非佛と疑著せられんとき、思量すべし、佛より以前なるゆゑに非佛といはず、佛よりのちなるゆゑに非佛といはず、佛をこゆるゆゑに非佛なるにあらず、ただひとへに佛向上なるゆゑに非佛なり。〔仏向上事〕、三四八頁)

『正法眼蔵』の言語表現に関する一考察(藤川)

④ころをあらひ、身をあらひ、みみをあらひ、めをあらふて、見聞すべからざるなり。〔発無上心〕、八一二頁)

⑤第二には、初禪をえて初果とおもひ、二禪をえて第二果とおもひ、三禪をえて第三果とおもひ、四禪をえて第四果とおもふ、第二のあやまりなり。〔四禪比丘〕、一〇六六頁)

#### F. 言い換えによる複文

①まことにしるべし、初心の坐禪は最初の坐禪なり、最初の坐禪は最初の坐佛なり。〔坐禪箴〕、一五一～一五二頁)

②いはゆる十二時は、十二面なり、十二面は、十二鏡なり、古今は十二時の所使なり、この道理を指示するなり。〔古鏡〕、二七七頁)

③もし晝は實にあらずといはば、萬法みな實にあらず、萬法みな實にあらずば、佛法も實にあらず。〔画餅〕、三二八～三二九頁)

④しかあるを、艸木・瓦礫を認じて無情とするは不徧學なり、無情を認じて艸木・瓦礫とするは不參飽なり。〔無情說法〕、六一六頁)

⑤黄金妙相といふは著衣喫飯なり、著衣喫飯は黄金妙相

なり。（「家常」、七七三頁）

⑥（あきらかにしりぬ、西天東土、佛祖正傳するところは、恭敬佛法僧なり。歸依せざれば恭敬せず、恭敬せざれば歸依すべからず。（「帰依三宝」、一〇一〇頁）

これらの分類に従って、代表的な千四百余りの複文を選出し、『正法眼蔵』の構文を、各巻毎に層別化したのが、表『正法眼蔵』七十五巻本ならびに十二巻本における構文分類』の資料である。これら『正法眼蔵』において複文が多く使われた必然性について、いくつかの理由があると推測するが、前出の角田氏の著書にも見られるように「教外別伝、不立文字」などの禅の特徴的な考え方が影響していると考えられる。実際には、道元禅師の『正法眼蔵』には「不立文字」という言葉は使用されていない。しかしながら、道元禅師にとって「言葉によらず、行による証」と「道得」との葛藤ではないかと推察している。この言葉に依存しないという実践を志すと同時に、言葉で言い得なければならぬという相反する概念、言葉を重視する「道得」とのせめぎ合いを解消する為に、採り入れた方法論がこれだったのでないだろうか。『正法眼蔵』に引用されている六祖と南嶽懷讓との問答での「説似一物即不中」の言葉にも見られるように、表現してしまえば、そこから固定化が始まることは否定できない。一つの事実を

表現するために多くの言葉を駆使することによって、言葉を抽象化せしめ、事実・事象のエッセンスを浮き上がらせることが可能となる。さらには、この言葉の多用による最大公約数的な理解によって、結果的に弟子達の力量に応じた受け取りも可能となるはずである。

#### 四 表現することの工夫

##### — 『正法眼蔵』各巻からの引用

道元禅師が入宋した際に、当時の中国禅でのスローガンともいえるべき「以心伝心」・「不立文字」の理念に関して十分に理解していたであろうことは想像に難くない。従って、「正伝の仏法」を伝えることを重視しながら、言葉に依存しないで主張していくことを、道元禅師は独自の方法で実証していったのではないかと推測する。以下、言葉による表現と正しい法を得ることに關しての記述を引用する。

「道得」の巻では、

諸佛諸祖は道得なり。（四五九頁）

（諸仏諸祖（真理を会得した人々）は言い表わせなければならぬ。）

「心不可得」の巻では、

問著たとひありとも、いまだ道處あらず。むかしよりいまだ一語をも道著せざるを、その人といふこと、いまだ



あらず（以下略）。（九二頁）

〈たとえ問うことはあつても、道う（言う）ことをして  
いない。昔から未だに一語も道うことがない人を、法  
（証）を得た人ということはない。〉

「見仏」の巻では、

自己の一轉語に轉ぜられて、自己の一轉佛祖を見脱落す  
るなり。これ佛祖の家常なり。（七三九頁）

〈自分の一轉語に轉ぜられて、自分が一轉して仏祖とな  
り、脱落（証りを得る）を現するのである。これは仏  
祖の常々のことである。〉

「山水経」の巻では、

あはれむべし、かれら、念慮の語句なることをしらず、  
語句の念慮を透脱することをしらず。（三九八頁）

〈残念ながら、かれらは、心のはたらきが言葉であるこ  
とを知らないし、言葉が心のはたらきを脱却している  
ことも知らない。〉

以上のように、言葉は、あくまで表現の手段であるにも拘  
わらず、仏法（真理）を表現する為には不可欠なものであり、  
なお且つ、十分に・的確に表現できなければならぬ。同時  
に、実践的な「行」の必要性が主張されていることは、「家常」  
「洗面」「洗淨」の巻々ならびに、「坐禪」に関する巻からも  
明らかである。

『正法眼蔵』の言語表現に関する一考察（藤川）

また、この「道得」と共に、「三」で述べた南嶽の「説示  
一物即不中」の引用の意図するところについて検証してみる。  
「徧參」の巻での引用では、

南嶽大慧禪師、はじめて曹谿古佛に參するに、古佛いは  
く、是甚麼物恁麼來。この泥彈子を徧參すること、始終  
八年なり。末上に徧參する一著子を、古佛に白してまう  
さく、懷讓會得當初來時、和尚接懷讓是甚麼物恁麼來。

ちなみに曹谿古佛道、徧作麼生會。ときに大慧まうさく、  
説似一物即不中。これ徧參現成なり、八年現成なり。

（七五一～七五二頁）

と述べ、言葉に表した途端に固定化が始まり、次の瞬間、そ  
れは陳腐化してしまふのである。この両者のジレンマを道元  
禪師は、「單文」（固定化）から「複文」（流動的＝複層的＝  
イメージ化）へ変換することによって、意図的に解消させた  
と考えられるのではないだろうか。繰り返しとなるが、真理  
（仏法）は、言葉によって表現できなければならぬ。勿論、  
前提として「行」が必要であるが、真理は言葉によって伝え  
ることができる。これこそが、『正法眼蔵』を和文で著した  
意図であると考ええる。命に限りがある以上、自身が寂滅した  
後も、実際に「行」を通しての嗣法が困難となつても、言葉  
によって「伝える」ことを目指したと言える。

以上の、表現方法を通して考えられることは、道元禪師が

## 『正法眼蔵』七十五卷本ならびに十二卷本における構文分類

(1 of 2)

卷数	卷名	肯定的複文	否定的複文	疑問的・ 反語的複文	命令的・ 禁止的複文	展開的複文	言い換えに よる複文	小計
1	現成公案	14	7	0	0	3	1	25
2	摩訶般若波羅蜜	8	0	0	0	0	1	9
3	仏性	50	20	9	4	21	11	115
4	身心学道	21	6	1	1	10	1	40
5	即心是仏	9	10	0	0	2	0	21
6	行仏威儀	11	11	6	0	4	3	35
7	一顆明珠	8	1	2	0	3	0	14
8	心不可得	1	2	0	0	1	0	4
9	古仏心	6	0	3	1	4	1	15
10	大悟	15	10	1	0	5	0	31
11	坐禅儀	4	1	0	1	1	0	7
12	坐禅箴	14	8	5	1	6	2	36
13	海印三昧	6	6	0	0	6	3	21
14	空華	8	0	0	0	5	2	15
15	光明	1	1	1	0	0	4	7
16	行持(上)	44	10	3	2	9	2	70
16	行持(下)	32	10	2	3	7	2	56
17	恁麼	3	0	0	0	1	2	6
18	観音	0	2	1	0	0	1	4
19	古鏡	7	4	3	0	0	4	18
20	有時	4	0	0	0	3	2	9
21	授記	17	3	3	0	2	3	28
22	全機	0	2	0	0	0	5	7
23	都機	2	2	0	0	1	4	9
24	画餅	7	0	0	0	4	5	16
25	溪声山色	3	1	3	0	2	2	11
26	仏向上事	4	0	0	0	8	4	16
27	夢中説夢	14	2	0	0	6	3	25
28	礼拝得髓	5	2	0	0	0	0	7
29	山水経	9	7	1	0	10	3	30
30	看経	6	3	2	0	1	0	12
31	諸悪莫作	10	3	0	0	5	6	24
32	伝衣	9	3	4	0	6	1	23
33	道得	5	3	0	0	1	0	9
34	仏教	11	2	0	0	3	3	19
35	神通	8	1	0	0	2	2	13
36	阿羅漢	3	1	1	0	0	0	5
37	春秋	0	0	1	0	0	0	1
38	葛藤	0	0	0	0	0	2	2
39	嗣書	1	1	0	0	0	1	3
40	栢樹子	2	0	0	0	0	2	4
41	三界唯心	9	3	0	0	3	7	22
42	説心説性	5	0	0	0	1	1	7
43	諸法実相	8	0	0	0	1	4	13
44	仏道	2	5	1	0	0	0	8
45	密語	6	1	0	0	0	1	8

『正法眼蔵』の言語表現に関する一考察(藤川)

一九八

## 『正法眼蔵』七十五巻本ならびに十二巻本における構文分類

(2 of 2)

『正法眼蔵』の言語表現に関する一考察（藤川）

一九九

巻数	巻名	肯定的複文	否定的複文	疑問的・ 反語的複文	命令的・ 禁止的複文	展開的複文	言い換えに よる複文	小計
46	無情説法	4	2	2	0	1	4	13
47	仏経	8	0	0	0	1	1	10
48	法性	3	0	0	0	3	0	6
49	陀羅尼	4	0	0	0	3	1	8
50	洗面	0	3	1	0	5	0	9
51	面授	7	2	0	0	0	1	10
52	仏祖	2	0	0	0	0	0	2
53	梅華	7	0	0	0	4	4	15
54	洗淨	4	0	1	0	1	1	7
55	十方	5	2	0	0	3	0	10
56	見仏	12	3	0	0	8	1	24
57	遍参	11	3	0	0	1	0	15
58	眼睛	5	0	0	0	3	0	8
59	家常	3	1	0	0	0	1	5
60	三十七品菩提分法	39	6	2	0	17	3	67
61	龍吟	6	0	0	0	1	0	7
62	祖師西来意	3	0	1	0	1	1	6
63	発無上心	12	1	0	0	6	2	21
64	優曇華	7	0	0	0	0	2	9
65	如来全身	6	1	0	0	0	0	7
66	三昧王三昧	5	0	2	0	0	0	7
67	転法輪	4	0	0	0	1	0	5
68	大修行	7	5	1	0	3	0	16
69	自証三昧	22	5	0	0	1	0	28
70	虚空	2	0	0	0	2	0	4
71	鉢盂	1	2	0	0	0	1	4
72	安居	5	6	0	0	0	0	11
73	他心通	3	11	0	0	0	0	14
74	王索仙陀婆	1	1	3	0	0	0	5
75	出家	3	2	0	0	0	0	5
小計		613	210	66	13	212	124	1238
12-1	出家功德	10	3	2	0	3	0	18
12-2	受戒	2	1	0	0	1	0	4
12-3	袈裟功德	20	11	5	0	1	0	37
12-4	発菩提心	7	12	0	0	2	0	21
12-5	供養諸仏	4	1	2	2	0	0	9
12-6	帰依仏法僧宝	12	1	0	1	3	1	18
12-7	深信因果	5	4	0	0	3	0	12
12-8	三時業	5	2	3	0	3	0	13
12-9	四馬	4	4	0	0	2	0	10
12-10	四禅比丘	6	14	9	0	5	0	34
12-11	一百八法明門	0	0	0	0	0	0	0
12-12	八大人覺	1	3	0	0	1	0	5
小計		76	56	21	3	24	1	181
合計		689	266	87	16	236	125	1419

自身の教義の内容を理解させるために、断定的な単文によらずに、敢えて多くの言葉を費やした複文によって表現することで、言葉の固定化を避けたと考える。その結果、個々人のイメージ化（思念への啐啄、気づき）・概念化によって教義を伝えることが可能となったと思われる。

また、ここで、道元禪師がイメージ化や概念化を容認しているのかという疑問が生じる。例えば、「現成公案」の巻には、身心を擧げて色を見取し、身心を擧げて聲を聴取するに、したしく會取すれども、かがみにかげをやどすがごとくにあらず、水と月とのごとくにあらず。（三三頁）

人の、悟りをうる、水に月のやどるがごとし。（四頁）と記載されており、言葉は、禪宗でしばしば喩えられる「月をさす指」のように、法（真理）を導く手段でしかないものの、現実には交わらない「水」と「月」の言葉から生み出されるイメージは否定されていない。

## 五 道元禪師にとつての、師と弟子の関係

道元禪師の学問に対する考え方は、「身心学道」の巻に述べられている。学道とは、

（かくのごとくの心、みづから學道することを慣習するを、心學道といふと決定信受すべし。この信受、それ大  
小・有無にあらず。いまの知家非家捨家出家の學道、そ

れ大小の量にあらず、遠近の量にあらず。鼻祖鼻末にあまる、向上向下にあまる。）展事あり、七尺八尺なり。投機あり、爲自爲佗なり。恁麼なる、すなはち學道なり。（四八〜四九頁）

（弟子は自己の境界を（その時その時の場合にに応じて）述べ、師は弟子の機根に応じて自から爲し他者の爲にする。そのようなことが、すなわち学道である。）と述べている。

では、言葉によって法（真理）を言い表すことを実際に担う、「師と弟子との関係」は、どのように捉えられるのか、また、道元禪師にとつて、「あるべき弟子の姿」、「あるべき正師の姿」とはどのように位置づけられるのかについて、『学道用心集』から検証してみる。

### （一）修行する態度

佛法修行、必稟先達之真訣、不用私用心歟。

（仏法修行は、必ず先達の真訣を稟け、私の用心を用いざるものか。）（『道元禪師全集』<sup>3</sup> 下巻、二五五頁）

但爲佛法可修之也。

（但だ、仏法のために之を修すべき也。）（同）

### （二）師とは、

見言而察也。

（言を見て而して察する也。）（同、二五六頁）

縦雖與良藥、不教銷方、作病之甚於服毒。

（たとえ良薬を与うといえども、銷方を教えざれば、病と作ること之れ毒を服するよりも甚だし。）（同前）

（三）正師とは、

夫正師者、不問年老者宿、唯明正法兮、得正師之印證也。文字不爲先、解會不爲先、有格外之力量、有過節之志氣、不拘我見、不滯情識、行解相應、是乃正師也。

（それ正師とは、年老者宿を問わず、唯だ正法を明らめ、正師の印証を得るものなり。文字を先と為す、解會を先と為す、格外の力量を有し、過節の志氣有りて、我見に拘らず、情識に滯らず、行解相應する、是れ乃ち正師なり。）（同前）

このように、道元禪師にとって「弟子」とは、「真理を稟けて、私心を用いず、ただ仏法のために修行する弟子」であり、「正師」は、「真理を明らかに出来、正しい方法で導き、年齢や学徳の高低や人望の厚薄に関わりなく、修行と理解が合致」して、弟子を導く力量を具えた人である。と同時に、これらの引用の中で特に「銷方」（葉の溶かし方）の言葉は、道元禪師の弟子への教導のための言葉として注目すべきである。道元禪師は、自らが「かくなるべし」と考えていた正師として、良薬（仏法）を正しく処方して弟子達へ、複文の多用による『正法眼蔵』を著わすことで、言葉の固定化を回避

『正法眼蔵』の言語表現に関する一考察（藤川）

するとともに、結果的に、弟子達を各々のレベルに応じて導いたと言えるのではないだろうか。道元禪師は、「葛藤」の巻において、

祖道の皮・肉・骨・髓は、淺深にあらざるなり。たとひ見解に殊劣ありとも、祖道は得吾なるのみなり。（五〇六頁）

と述べていて、仏道の得吾において優劣を設けられてはいないはずである。

## 六 結論

道元禪師にとって、仏法は言葉で言い表され、正しく伝わなければならない。これまで、『正法眼蔵』の読解の難しさについて、複文による言語表現を中心として論じてきた。先ず、「三」で、『正法眼蔵』各巻の複文の内容を、文法的・内容的分類によって構文を仕分け、それぞれの例を本文の引用により示すことができ、これにより、道元禪師が複文を多用していることが確認できた。次に「四」で、単文から複文の多用へと表現方法を工夫することで、言葉の固定化を避け、その結果、言語の抽象化が可能となり、事物・事象の最大公約数的なイメージを表出することができることを確認できた。さらに、「五」では、『学道用心集』から弟子と正師のあり方を検証し、複文を用いた表現によって、副次的に、弟子

達の力量に応じて教義を理解できるようになったことも確認できたと思う。

以上のことから、道元禪師が、直弟子および将来の弟子に『正法眼蔵』を複文の多用による和文で残された目的と意図は、第一には、言葉の固定化を避けること、第二に、副次的に各人の力量に応じての理解を可能とさせることだと言える。なぜならば、これまで見てきたように、『正法眼蔵』における複文の多用は、言葉の抽象化をもたらす。これにより、各人のレベルに応じた理解を深めることができ、学人のレベルに応じた理解が結果的にもたらされる。ここで、問題となるのは、道元禪師が言語表現による教義の概念化を肯定しているか否かであると思われるが、これも「水と月」との関係性を否定していないことから認められる方法であり、「正伝の仏法」を伝える方法として深い意味があったと理解できる。今後の課題として、これらの言語表現について、新刊の『本山版訂補正法眼蔵』による複文の分類の再確認を行い、最終形を整えたいと考えている。また、漢籍の対句表現との比較等も考慮した分析を通して、さらに研究を深めていきたい。

### 注記

(一)「永平寺示庫院文」は、七十五巻本および六十巻本『正法眼蔵』では収集されておらず、九十五巻では、「本山版」の第八十一巻

に収められている。また、『禪学大辞典』によると、「流布本」では、第八十二巻に配されている。

(2)「観音導利興聖護国寺重雲堂式」は、右記と同様、九十五巻の第五巻に収められている。

(3) 引用文の理解のために、前文を記載する場合は、( )で、表わした。

(4) 大久保道舟編『道元禪師全集』下巻、筑摩書房、一九七〇年

〈キーワード〉『正法眼蔵』、言語表現、複文、教導、教義の概念化